

主な展示資料

資料名	出土地	数量	所蔵・保管等
土師器杯	米沢市二夕俣A	19	米沢市教育委員会
土師器甕	米沢市二夕俣A	2	〃
土師器甌	米沢市二夕俣A	1	〃
須恵器蓋	米沢市上浅川	1	〃
須恵器壺	米沢市上浅川	1	〃
土師器杯	山形市松留	1	山川義雄氏
土師器埴	河北町下楨	1	山形県教育委員会
土師器器台	河北町下楨	2	〃
土師器壺	河北町下楨	3	〃
土師器甌	河北町下楨	1	〃
土師器台付鉢	河北町下楨	1	〃
土師器鉢	山形市漆山	1	高木清吉氏
土師器杯	天童市願正壇	8	山形県教育委員会
土師器高杯	天童市願正壇	4	〃
土師器甌	天童市願正壇	1	〃
土師器甕	天童市願正壇	3	〃
土師器台付甕	天童市願正壇	1	〃
土師器壺	天童市願正壇	3	〃
土師器小形杯	天童市願正壇	2	〃
土師器小形高杯	天童市願正壇	1	〃
土師器小形甕	天童市願正壇	1	〃
土師器小形壺	天童市願正壇	5	〃
土師器小形鉢	天童市願正壇	1	〃
須恵器杯	天童市西沼田	1	〃
須恵器蓋	天童市西沼田	1	〃
須恵器壺	天童市西沼田	1	〃
須恵器碗	天童市西沼田	1	〃
土師器杯	山形市嶋	5	本館
土師器高杯	山形市嶋	4	〃
土師器甕	山形市嶋	2	〃
土師器甌	山形市嶋	2	〃
炭化粃	山形市嶋	一括	〃

資料名	出土地	数量	所蔵・保管等
種子(桃)	山形市嶋	一括	本館
種子(飄箆)	山形市谷柏	一括	〃
(麻)	山形市谷柏	一括	〃
(瓜)	山形市谷柏	一括	〃
(桃)	山形市谷柏	一括	〃
(胡桃)	山形市谷柏	一括	〃
笏	山形市谷柏	一括	〃
弓	山形市嶋	1	〃
鞍橋(石膏模型)	山形市嶋	1	〃
骨製装身具	山形市嶋	3	〃
櫛	山形市嶋	2	〃
紡錘車	天童市願正壇	3	山形県教育委員会
紡錘車	山形市お花山古墳群	1	〃
鉈	川西町下小松古墳群	1	川西町教育委員会
砥石	天童市願正壇	1	山形県教育委員会
砥石	米沢市上浅川	2	米沢市教育委員会
管玉未製品	米沢市上浅川	10	〃
琴柱型石製品	河北町下楨	2	山形県教育委員会
子持勾玉	河北町下楨	1	〃
有孔円板	河北町下楨	1	〃
手づくね土器	山形市嶋	10	本館
石製模造品(鏡)	尾花沢市上柳渡戸	4	山形大学附属博物館
(有孔円板)	尾花沢市上柳渡戸	10	〃
(剣)	尾花沢市上柳渡戸	4	〃
(刀子)	尾花沢市上柳渡戸	3	〃
(勾玉)	尾花沢市上柳渡戸	4	〃
(鎌)	尾花沢市上柳渡戸	3	〃
(斧)	尾花沢市上柳渡戸	3	〃
変形擬文鏡	山形市お花山古墳群	1	山形県教育委員会
勾玉	山形市お花山古墳群	3	〃
管玉	山形市お花山古墳群	8	〃
ガラス小玉	山形市お花山古墳群	一括	〃
埴輪	山形市菅沢古墳	2	山形市郷土館



古墳時代の  
ムラとくらし  
昭和61年9月6日(土)～10月12日(日)  
山形県立博物館

大きな前方後円墳に象徴される古墳時代は、稲作農耕を基盤とした経済が高度に成長した時代です。山形でも稲荷森古墳をはじめとして各地に古墳が築かれてきましたが、このころ、まわりのムラムラでは、人びとはどのような生活をしていただろうか。

この企画展は、古墳時代の社会や文化を底辺で支えていたムラの人びとのようすをさぐり、考えてみようとするものです。

開催にあたって、県教育庁文化課をはじめ米沢市教育委員会、川西町教育委員会、山形市郷土館、山形大学附属博物館、高木清吉氏、山川義雄氏、阿子島功氏、奥野義雄氏からご指導ご協力をいただきました。厚くお礼申し上げます。

わが国に稲作農耕が伝わったのは、前3世紀ごろのことといわれています。稲作りを始めたことによって、それまで以上に生産物の余剰が生まれ、富として蓄積されるようになりました。

余剰を利用して手に入れた最新鋭の鉄製農工具は灌がい・排水などの土木技術の進展をうながし、土木技術の進歩はさらに生産性を増大させます。このような飛躍的な富の蓄積は社会構造を変化させ、やがてムラを統率する豪族を生み出すこととなります。

このような豪族によって造られた大きな墓を古墳といい、特に前方後円墳が盛んに造られた時代を古墳時代と呼んでいます。古墳を造るためには大勢の人びとを動員し使役することができるような社会構造や古墳を設計し築き上げるための土木技術、そしてこれらを支えるための膨大な富の蓄積などが必要ですが、これらはすべて稲作農耕の進展によってもたらされたものです。言葉をかえれば古墳とはこのような高度に成長した農耕経済社会の集大成として築かれた政治的記念物といえることができます。

3世紀の末ごろから7世紀の初めないし中ごろまでと考えられている古墳時代は、大別すると4～5世紀代を前半期、6～7世紀代を後半期と考えることができますが、本展では後半期を中心にムラのようなすや人びとの暮らしを展示しています。



後半期のムラ(中山町物見台遺跡)

### ムラのような

弥生時代から古墳時代前半期にかけて扇状地扇端部の自然湧水地帯や自然堤防上に小さなムラが営まれていました。稲作りに適した低湿地の近くの微高地が選ばれていたようです。住居は方形の堅穴住居で、中央付近には炬が設けられていました。

後半期になるとムラは台地の奥にも発展するなど立地が多様化

し、一般的に拡散する傾向が見られます。鉄製農工具の普及にともなう土木技術の進歩によって耕作地が拡大したことや、畑作が広まったことなども原因のひとつと考えられます。住居は前半期と同じ方形の堅穴住居ですが、壁にはカマドや貯蔵穴が設けられるようになり、住居内で厨房が確立したことがうかがわれます。

このころ畿内地方では地上式の住居が出現し始めますが、同じ時期、山形市嶋遺跡や天童市西沼田遺跡などでも低湿地に地上式の住居を建てて住んでいたことが知られています。嶋遺跡や西沼田遺跡が特殊なケースなのか、あるいは一般的な傾向なのか今後に残された問題といえます。



山形市嶋遺跡出土の甗(後半期)

### 人びとの暮らし

弥生時代後期から使われた始めた鉄製の農工具は、古墳時代には一段と普及が進み、とくに後半期になるとそれまでのムラを単位とした保有から住居(家族)を単位とした保有へと移り変わってくるようです。

食生活でも、甗(こしき)が普及して米を蒸して食べるようになったり一人一人が自分専用の食器を持つようになるなど、大きな変化も出てきます。また従来からの土師器(はじき)に加えて須恵器(すえき)という新しい種類の土器も見られるようになりました。

鉄製農工具の普及にともなってさまざまな木器も作られるようになり、嶋遺跡では、鋤(すき)や鍬(くわ)などの農具だけでなく機織りの道具や木弓なども出土しています。弓は鹿などの獣を狩るのに使われたものでしょう。稲を作るようになっても獣の肉は重要なタンパク源でした。とくに鹿などは、肉は食用に、角や骨、皮は服飾の材料にと有効に用いられたようです。



山形市お花山古墳群(後半期)

### 祈りとまつり

古墳時代のまつりには、大きく分けるとムラのまつりと峠のまつり、そして墓前(古墳)で行なうまつりとがあります。いずれも山や土地の霊、先祖の霊といった、いわゆる祖霊(それい)をまつっていたものと考えられています。このころはまだまつりとまつりごと(政治)とが分かれておらず、祭りを行なうことは、即ちまつりごとをすることでもありました。

ムラのまつりは豊作を願うなど農業生産にかかわるもの、峠のまつりは通行の安全を願うものであろうと考えられており、「手づくね土器」や「石製模造品」などが祭器として使われました。

石製模造品は滑石などで実物を模したミニチュアで、神がよりつくための依代(よりしろ)として櫛の枝などに吊り下げて用いたと考えられます。奈良県吉野地方などでは、山の神の祭りに鍬や鎌、斧、鋸といった農道具、山道具のミニチュアを作り、棚や「カンジョウ」と呼ぶしめ縄に吊り下げて供える風習がありますが、あるいはこのようにして祖霊をまつったのでしょうか。

墓前でのまつりは、葬送の儀礼であると共に今までの首長から新しい首長への権力の引き継ぎを自他ともに確認する大事な儀式でもありました。古墳のまわりには埴輪が立ち並び、棺の中にはいろいろな宝物が納められました。大之越古墳からは剣や刀などの武器、馬具、鍛冶具などが出土しており、お花山古墳群からは管玉や勾玉、鏡などが出土しています。こうした古墳でのまつりは、畿内などでは7世紀代に終わりをつけますが、東北地方では奈良時代の半ばころまで行なわれていました。